

癸丑遊歴日録

松陰ゆかりの地巡検概略

岸和田・熊取・富田林・五條・檀原

十月二十八日から三十日(月) 風の影響による雨の中、松陰ゆかりの地を訪ねた。

岸和田藩校講習館(岸和田)

「二十三日……夜、相馬一郎を訪ふ、名は肇、字は元基。帰りし時は己に丑なり……」

嘉永六年(一八五三) 二月二十三日夜、松陰は岸和田城下の藩校講習館を訪ねた。



保育所前

講習館に相馬九方(二郎)を訪ねた。以後九日間出入りした講習館は、現在、保育所となっており、遺構は全く残っていない。

講習館の一室で囲炉裏を囲み、茶を飲み、せんべいをかじりながら、夜を徹して時勢について熱く語り合ったという往時を偲ぶには寂しい変わりようである。

中家住宅(熊取)

相馬九方(一八二〇〜一八七九) 漢学者。讃岐高松に生まれる。徂徠学を学び、京都で学び、京都で学問修業を重ねる。

嘉永四年(一八五二)年、和泉岸和田藩主岡部長慎(みかぢか)に招かれ、藩校講習館教授となる。通称は一郎、名は肇、字は元基。



中家表門

在した。中家は平安時代、後白河法皇が熊野行幸の時に立ち寄り、行宮(仮設の御所)として由緒ある泉南地方の旧家である。「中」の家名は、前九年の役(一五〇〜一六二)に源頼義と共に奥州へ下向した高瀬清原武盛の跡を継いだ嫡男盛晴が、中と改めたことに始まり、盛晴の嫡男盛秀は左近将監に任じられ、中家は代々「左近」を名乗った。

中家住宅の南に面する大きな表門(三間薬医門)を入ると、正面に豪快な土間を持つ主屋(母屋)が妻面をみせて建っている。主屋は入母屋造り・萱葺き・妻入りで、周囲に本瓦葺きの庇を持つ土塀をめぐらしている。かつては、主屋の東側には別棟の式台玄関のつく客殿(書院)があり、松陰はここに泊まったと思われるが、今は失われてない。主屋の造りは岸和田藩の郷士代官や七人庄屋の筆頭を務めた中家のかつての繁栄ぶりを雄弁に物語っている。

佐渡屋仲村家(富田林)

薄暗くなる中、佐渡屋仲村家を訪ねた。現在も使われており、中を見学することは出来ない。

「十四日 晴。節節齋に従ひて錦部郡富田林の仲村徳兵衛の家に至る。」

「三月三日 岸和田を発し、熊取の中左近の家に至る、二里。医生左海祐齋数々来る。」

熊取町生涯学習推進課の古市氏による説明を受けながら見学した。

松陰は三月三日、四日の二日間滞



仲村家は土地を代表する酒蔵家で、幾棟もの酒蔵を列ねる大きな家屋敷を有していたが、その後、多くは失われた。しかし、往時の面影は今も残っている。

松陰は二月十四日から二十二日までの九日間、三月十八日から二十九日までの十二日間、計二十一日間滞在している。

森田節齋旧宅跡(五條)

天誅組記念館の内倉氏の案内で雨の中、森田節齋旧宅、堤孝亭宅、頌徳碑を訪ねた。

「十三日 雨。……森田謙藏を訪ふ。謙藏、名は益、節齋と号し、江

幡五郎も師なり。……後乃ち達し、為に五郎の事を語り、又其の文を論ずるを聴きて夜半に至る。快し。遂に宿す……」

二月十三日、「五條が生んだ儒学者で、明治維新の思想的指導者」といわれた森田節齋を訪ねている。旧宅はすでに無く、「森田節齋宅址」の小さな案内板があるのみである。節齋旧宅から百メートル離れた所に堤孝亭の家がある。今は書店となっている。松陰は堤宅に寄宿し節齋の許へ毎日通っている。



森田節齋宅跡

谷三山旧宅跡(檀原)

木村氏の案内で谷三山旧宅を訪ねた。「これまで吉田松陰と谷三山で案内を依頼されたことは皆無である」と話され、檀原は古代歴史の町と実感させられた。

激しくなる雨の中、谷三山宅をめざした。途中、八木辻の交流館を訪

れ、しばし休憩。旅籠として使われていた建物で、往時の様子を十分に偲ばせてくれる。

興讓館のあった三山の旧宅は、八木辻からさほど遠くない八木町三丁目に現存し、建坪六百坪といわれる豪壮な家構えである。今の当主谷孫兵衛氏の家、もと興讓館に松陰に関する資料は何も残されていない。

松陰は四月五日、五月二日の二回興讓館を訪れている。「四月五日雨。八木に至る。行程五十町。谷三山翁に謁す」「五月二日 雨已にして晴る。吉太郎を伴ひ、田井庄を発して八木に至り、三山翁を訪ふ」親



谷三山木像(谷家蔵)

しく学んだのは、この二回にすぎない。若くして聴力を失った聾者の三山とは、全て筆談であったが、「谷三山は天下の奇人と謂ふべし」「昌平(三山)の学逢ふ毎に之れを奇とす」などというように、その都度、三山の学識や人と為りに強い感銘を受けている。松陰は上方をめざす塾生に対して大和八木へ立ち寄り、三山に学ぶように盛んに勧めている。谷三山の影響は、松下村塾の教育にも及んでいる。

